



Title	朝鮮農村社会瞥見記
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	著作集 V巻用、 5頁。
Citation	民族学研究, New1(1), 47-73
Issue Date	1948
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77421
Type	journal article
File Information	B013_0203p99p107_.pdf



朝鮮農村社會瞥見記

鈴木榮太郎

し一方にこちらの農村調査に對する私の抱負が甚だ大
きくあつた丈に、それ丈私は私の第一回目の農村調査
には期待するところ多く、やゝ硬直した様な感じさへ
持つに至つた。

第一回目の調査は恐らく此後の見方に對して色々の
先入觀念を作るであらうから、第一回目の觀察は最も
慎重に行ひ最も正確なものでなければならぬと思つた
のである。それには豫めどんな準備が必要であるか。
私はかくの如き準備についても色々に考へて見た。そ
して更に角調査に出掛けるなら充分の心の準備が出来
てから出掛けるがよい、まだこちらに来て日も淺く家
庭や大學での生活も充分に落ちついて居ないのである

此四月から朝鮮に移り住む事になつた時、私はこれ
からの自分の直接の研究事項をあれやこれやと考へた
のであるが、其等の何れの問題に對しても朝鮮の農村
は最も多く私の研究材料を藏して居るところであると
思つた。私は必ずしも農村社會學と云ふ様な形で私の
これからの研究を統一しようと思ふのではないのであ
るけれども、矢張り農村が私にはこれからでも最も親
しむ可き研究室である様である。

私は愈々朝鮮に来てからは、早く農村を見たいと極め
て切なる願望を絶えず懷いて來たのではあつたが、然

から、こちらの風土に對して健康の自信も充分についてからでよからうと自ら慰めながら在舊日を過して來た。

然し私はまだそんな落ちつきが充分に出來て居ない内に第一回目の調査に出掛ける必要に迫られた。それは城大の總力聯盟研究班で此夏休みに學生四十名が参加して南鮮群山郊外の不二農場附近の農村生活を醫學や法律學や經濟學や社會學の方面から調査研究する事になり、その社會學的調査研究の豫備調査に秋葉教授と私とそれに研究班のマネジャー格である學生主事補の泉靖君と三人が出掛ける事になった。秋葉教授は出發直前に都合が生じて行けなくなられたので、結局私と泉靖君と二人で出掛けた。

そんな譯で此調査旅行は、私にとつては大事な朝鮮での第一回目の農村調査旅行ではあつたが、充分に心の準備が出來て居たと云ふ譯でもなく、又右の如き特別の使命を持った調査であつたのであるが、然し結果

に於ては矢張り行つてよかつたと今では思つて居る。

群山の驛についたのは七月二日の朝七時二十分。その前五時四十五分に裡里驛着、そこで群山行きに乗り換へたのである。京城驛から木浦行の列車でたつたのが昨夜の十時五分。車内は空席が多く、私が横になるには充分の座席があつたのであるが、とうとう裡里につくまで一睡も出來なかつた。夜が明けて窓外が明るくなつたので、起き上つて窓から外を眺めたのはどの邊であつたかはつきりしないが、裡里の驛につく三四十分も前であつた。私は夜明けの淡あかりの中に展開する一面の水田が青々として田に水があるのを見て、とても嬉しかつた。夏の始め以來殆ど雨がなかつたので田植が出來ないで農村は困つて居るだらう、うっかりすると早賊騒ぎでゆつくり調査など出來ないかも知れぬと案じて居たからである。裡里のあたりは一望

の水田で、朝鮮の穀倉と云はれる名に恥ぢない展望である。群山に着くまで水田ばかり眺めたが、よく見ると水は確かに充分ではない。少し高い位置にある水田などはまだ田植が出來ないで居るところもある。然しそれは全體から見ればほんの少ししかない。

群山の驛に着くと、先發の泉君と不二興業會社の人が出迎へて居られた。群山驛からバスで一時間ばかりで不二興業會社沃溝農場に着いた。農場は門を入つてから屋敷の構へまでも數千坪もある雄大なもので、大きな倉庫や作業場が幾棟もあつた。中央に二千坪もある廣場があり、廣場の奥は丘陵になつて、正面の石段を登ると事務所や炊事場や食堂や座敷等が幾棟にも分れて居り、その背後の松山の中には場長や場員等の住宅が數軒も立つて居た。農場の中に郵便局もあり、局長の早川昇氏が農場の事實上の場長である。農場の事務所の一部が郵便局になつて居るのを見ても、流石に大經營の農場である事が分る様であつた。農場の正面

に立派な日本室の大きな座敷があり、そこを私等は滞在中提供されて居た。私等はその座敷で朝食を済まし、すぐ屯山部落の調査に出掛けた。

最初總力聯盟では、沃溝農村と不二農村とを調査する計畫であつた。沃溝農村とは不二興業會社沃溝農場の半島人の小作人約八百戸よりなるもので二三十戸乃至五六十戸の聚落に分れて居る。不二農村と云ふのは不二興業會社の水田約千町歩を經營する爲に内地の三十二府縣より募集されて來た内地農民が各府縣毎に十戸づつ聚落して居るものである。今は會社よりはなれて産業組合を組織して三十年間に毎年約千圓づつ負債を償却して三十年後には各戸三町歩の耕地と住宅を所有する様になつて居る。現在は五百十八戸である。右の二つの村は何れも不二興業會社に關係して居るもので、同會社で海岸の埋立をして作つた耕地約二千

町歩を経営する新開村で、まだ二十年の歴史しか持たない村である。總力聯盟では此二つの村を調査する事になつて居たが、朝鮮の一般の農村の事情はこれでは分らないし、私が右の二つの村の調査立案をするとしても、朝鮮の一般の村を豫め一つ見なければならぬので、今一つ古くからの村として附近の山麓の村屯山洞をも調査する事にした。かかる意味で附近の村の中から一つの村を選定する様に前回泉君が下交渉に來られた時同君に依頼して、其結果同君が屯山を選定して居たのであつた。

朝食をすますとすぐ屯山を見る事にした。農場の指導員の一人で日本語のよく出来る半島出身の農場員高井君を案内者兼通譯となつてもらつた。

農場から屯山までは約半里で目がくらむ様に眞夏の太陽が照つて居た。途中私は案内者に少しの暇もなく

10

四

5

6

7

8

9

迄朝鮮の農村に關し勿論全然無識ではなく、書いたものも幾らか讀んで居るし、岐阜に居た頃にも、半島出身の學生から朝鮮の農村に關して聴取した事も幾々あつた。又昭和三年頃京城で全國農學大會があつた時に、水原附近の農村を見た事もあるし、昭和八年頃滿洲旅行の歸途秋葉教授と當時總督府に居られた村山智順氏の御東道を得て京城附近の農村を見た事もある。

それ等の經驗を通じて得た結論の一つとして、私は朝鮮の家や村に於いては、内地の家や村に於けるより著しく個人が獨立して居ると思ふに至つて居たのである。この見方が誤つて居るか正しいかは此後の調査研究によつて明らかにされなければならぬ大きな問題の一つであるが、然し私は今から腰をすゑて朝鮮社會の研究をなす可く運命づけられた以上、從來の不分な根據から出來て居た先入觀念は一應全部捨てたいと心で願つて居たのである。今巫女の話から、私は忘れたかと思つて居た此先入觀念を又つきつけられた譯

色々の質問をした。前に泉君が豫備調査に行つた時に同君が巫俗について色々調査したらしく、その爲に案内者は主として巫俗の調査と思つて居たらしいので、巫女の家にも行ける手筈がしてあると向から云つた。泉君は城大社會學科の出身で秋葉教授の薫陶を受けた人、秋葉教授が朝鮮巫俗の研究者としての權威である事は誰も知つて居る通りである。話は巫女の事に移つた。このあたりの朝鮮人の部落では葬式は佛教によるもの、儒教によるもの、巫俗によるものの三類に分ける事が出来るが、最も多くは儒教によると云ふ事である。然しそれは家によつて定まつて居るのではなく、死んだ人の個人的信仰に基づくのである。信仰などは全く個人の好みによるのであつて、家によつては定まつて居ない。主人は佛教を好み妻は巫俗を好み息子は儒教を好むなどであつて、そんな事が家によつて定まつて居る様な事は全然ない。案内者の高井君がさう云つた時私はハツと思つた。と云ふのは、私はこれ

である。

葬式の時の話、病氣や出産の時の話、結婚式の時の話などを次々に尋ね、最後に部落とは何ぞやと云ふ話を持ち出して色々話して居る内に屯山の部落に着いた。この案内者の高井君は非常に日本語のよく分る人で、この屯山から餘り遠くない村の出身で五十ばかりの溫厚な人である。今は内地式の姓に變へて高井君と呼んで居た。

屯山の聚落はその東北に在る二百米位の丘陵の山麓にあつて、その西南には千餘町歩の沃溝農場の水田が展開して居る。この水田の向うには黃海が幾つもの島を浮べて横がつて居る。沃溝農場が出来る前は、此部落は直接黃海に面し、鹽田經營をも加味した半農半漁の村であつた。屯山は非常に古くから續いて來た村の様ではあるが、純農村になつたのは沃溝農場が出來て鹽田や漁業が出來なくなつた時からである。

屯山について案内された家は此春まで區長をつと

村の事を一番よく知つて居ると云ふ人の家であつた。禮を失する様であつたが一應家の内を一通り見せて貰つた。前から私等の訪問を豫告してあつたと見え、或る一室に席を設けてあつた。朝鮮の民家の一室に客となつて坐するのははじめてである爲に、私はしきりに室内を見廻したり居心地を注意深く吟味して見た。内に坐つて見ると案外涼しくて落ちついて居る様に思つた。凡そ客人の坐す可きところ、主人の坐す可きところ、第二位第三位の客の坐す可きところなどに順位のある事、室の一般の構造などについて一通り尋ねて居る内に、此村の所謂古老と云ふ人が來た。古老の服装は禮服であつたと云ふ事をあとで聞いた。私等が色々の事を聴取して居る間に、村の人々が何人も土間の方にある窓の口から珍らしさうに顔を出して私等をのぞいて居た。

私がこの調査で確かめたいと思つて居た第一の事は、内地の部落にあたるものがここでは何であるかと云ふ事

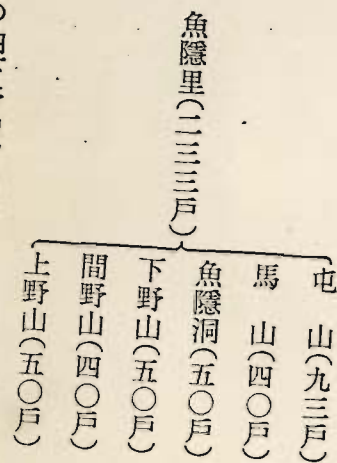
三戸であるが、それが又更に二つの聚落に分れて居る。屯山と新起村がそれである。新起村は十二戸で十數年前移住者によつて出來たもので、それが昔からの屯山洞と一つになつて今の屯山部落を形成して居る。今では村づき合ひは屯山と新起村は何も一つになつて居ると云ふ事であつたが、此點は充分に確かめ得なかつた。

幾つかの舊洞を含む里が久しく部落と云ふ内地式の呼稱をもつて呼ばれ、種々の農村生活指導もそれが單位とされて居たが、最近では古くよりの洞がもつと生活に即した團體である爲に生活指導もそれを單位とする様になり、部落と云ふ呼稱も現在では舊洞を意味する様に變つて來た。内地に於ける農村指導が町村單位から部落單位になつて來たのと同様の過程である。

昔は郡の下には洞があつたものである。それが内地に於ける維新前の村であつて、近時に於ける其運命も兩者相似て居る様である。昔の郡は今の郡より小さく、

であつた。それが昔の洞であると云ふ事を明らかにする迄随分くどい様な質問をしなければならなかつた。朝鮮に於ける自然村は面でもなく里でもなく區でもなく昔の洞であると云ふ事を、少くとも此度の調査の結果からは明白に云ひ得る様である。

沃溝郡沃溝面は約二千百戸位であるが、此沃溝面は九つの里に分れて居る。その内の一つである魚隱里は六つの部落に分れて居る。今は部落と云ふが昔はそれを洞と云つたのである。



右の内外下野山、間野山、上野山の三部落は何れも干潟によつて近年開發された移民部落である。屯山は九

全羅北道全體では郡の數は前より三分の一位減つて居るさうである。昔は一郡に必ず社稷があつて、春と秋に祭りがあつた。旱魃の時の雨乞も郡内のものが集まつて社稷で行つた事が多かつた。併合後社稷は廢せられて居る。

舊洞が基本的な村落協同體である事は色々の點から觀取され得る。山神堂を共同維持崇敬する祭祀團體を組織して居る事、自治的機關として洞中契を組織して居る事、共同奉仕作業や洞宴がある事、共同労働組織としてツレを組織して居る事、洞に總有の財産がある事等によつて、少くとも屯山洞は一つの村落協同體を構成して居る。これ等の點に關する聴取事項を述べる前に、洞が朝鮮一般に基本的村落共同體を形成して居るものであるかどうかについて参考までに一考して見る。

此點に關しては全鮮各地については一樣には云ない様である。現に濟州島に於ける事情は少しく異つて

「この祭神をまつる部落民は、概して地縁に依つてその生活と共にする小集團であり、行政上の部落よりは一般に小さき群をなすものであつて、つまりは部落の最小單位を構成する祭祈團體と見做され得る。従つて行政上の部落中にはこの團體が一つの事もあるが、概して二つ以上、中には數個乃至十數個の多きに上るものもないではない。」(村山智順『部落祭』一頁)。

村山氏の部落會

年中行事に就き協議（京幾道永同郡）。基本財産管理報告、部落共同施設其他必行事項に就き協議懇談す（同、忠川郡）。部落民中非行者に訓戒を行ひ、祭費の清算をなす（忠清南道舒川郡）。各種任員の任免等（全羅南道麗水郡）。里

「年初に洞會を開き部落民中喪主又は不具者に非ざる者を
選ぶ（慶尙北道盈德郡）。洞會を開いて、事故なく淨潔なる
人を選ぶ（同、永川郡）。毎年洞會を開き其年中喪なく又家
族中妊娠者なき幸運、敬神觀念強き男子を選ぶ（同、星州
郡）。洞會に於いて嚴選（慶尙南道馬山府）。慶尙南道各郡は
皆洞會に於いて選定。洞會に於いて選定（黃海道安岳郡）。
洞會にて推薦（同、載寧郡）。洞會を開き洞中の有望人物を
選定（同、鳳山郡）。以下略」（同書二五九頁）。

洞長手當負擔額、洞核算又は洞有財産管理に
す(同、順天郡)。洞契を開き、勞銀の協定、契金の決算報
告其他必要事項を協定(同、珍島郡)。部落民中篤行者を表
彰することあり(同、盈德郡)。洞風教化、農事經營、其他
に就き評議決定(同、軍威郡)。以下略。

次に右の生活協同體が洞より大きくもなく小さくもない事は、右に述べた洞會からも推定出来るのであるが、部落祭の祭名や祭神名からも~~また~~承知する事が出来る。
即ち部落祭の祭名及び祭神に關する村山氏の調査報告によれば、洞の名を用ゐるものが多い。明確に調査さ

れた三〇七例の中に洞祭と云ふものが八十五、洞神祭と云ふものが二十一である。その他では城隍祭四十八、山神祭三十七、堂山祭三十四、と云ふのが多い例である。最も多いのは洞祭と云ふ呼稱である。神名としては三九〇例の中、山神百十四、洞神百九、城隍神六十八、山川神二十三等である。地域團體を形容詞としたものは洞が絶對的に多い。他には里社神があるのみである。(同書一二四頁)

朝鮮に於ける自然村は恐らく一般的には昔の洞であらう。そしてそれは客觀的には洞祭を營む祭祀團體として最も鮮やかに觀取されるものであらう。然し此洞が又後に述べる様に農業上の共同労働團體(ツレ)を組織して居ることは、洞の社會的獨立性を更に鮮明なものとして居る様である。

却説屯山に於ける部落神は、部落の背後にある屯軍山の頂上近い山腹に在る山神堂である。この邊では昔の洞には堂があつたところもあり無いところもある。

あればそれは山神である。笠松を神木として祀るところも稀にはある。漁村には必ずあつたが、それは必ず山神堂である。附近の島の部落にも山神堂は必ずある。内地の金比羅様の様なものだが高井君が云つた。毎年の例祭の祝文や神饌等の事を記入した文書を見せて貰つたが餘程古い時代から毎年綴り加へられて今日に及んで居る。それを見せて貰つた祝文を寫した。古い頃の年代を見たが、よく分らなかつた。餘り古いので最初の方は破れ落ちて居た。屯山にある古い記録はこれだたと前區長が云つて居た。

山神堂の例祭は舊一月十五日であるが、その前一月三日に巫女が神前に禱りを捧げる。そして神懸りした巫女は米の中に挿し込んだ竹筒を手につけて、恐らく神意のまに部落に降りて來て神の命ずる家に入り込むのである。その家が其年の祭官となつて祭祀の主役を演ずるのである。外に山上化主二人及び山下化主一人が部落民中清淨なる者(其家に不潔な物がある者)は山神堂から遠ざかる(其家に不潔な物がある者)は山神堂から遠ざかる。至及び中央の祭壇に次ぎにねつて廻るのであつて、内地の祭例に於ける渡御と同様のものである。此行列は先頭に令旗二本、次ぎに農旗一本、次ぎに軍物(太鼓鐘等の樂器の一組)、次ぎに部落の老若男女の一團である。軍物を奏する者は花冠、花襪、及び飾りのついた帶をしめて居る。正午には午餐を共にするが、その時には部落民は全部村の中に入つて御馳走を食べる。この時課錢の最高出捐者が最上座の席につく。五方巡りが終つて夜になると、祭官が山神堂に参り燭を神前に供へて禱念する。

事なき者)の中から選ばれる。祭官の家は禁繩をはりまにし神聖視される。十一日から祭官山上化主山下化主は襖被をはじめ。山麓の井戸は此部落隨一の良泉で、十三日に全部落民の手によつて井戸換が行われ、その周圍に禁繩が張られる。此の井水は十四日に始めて神前に供へられ、又此水で神前に獻げる鶏の料理もする。神酒二三升は豫め醸造してある。神饌の費用として部落各戸から三・四錢づつ課錢も徴されてある。十四日夜は祭官等が祈念して居る中に、部落民は總出で山神堂のある山の山林内を掃除して十五日朝に至る。祈禱に於ける部落民は自分の名前を書き入れる。無名の赤子も其生年月日を記入する。村の四至及び中央には高く祭壇が設けられる。十五日朝には山神堂に神饌を供へ祭官が祝文を讀んで祀る。その式典がすむと部落の四至及び中央の祭壇に神饌を供へる。その神饌は一部は山神堂に供へたもの、一部は新たに作つたものである。それがすむと五方廻りが行われる。そ

れは山神堂から遠ざかる(其家に不潔な物がある者)は山神堂から遠ざかる。至及び中央の祭壇に次ぎにねつて廻るのであつて、内地の祭例に於ける渡御と同様のものである。此行列は先頭に令旗二本、次ぎに農旗一本、次ぎに軍物(太鼓鐘等の樂器の一組)、次ぎに部落の老若男女の一團である。軍物を奏する者は花冠、花襪、及び飾りのついた帶をしめて居る。正午には午餐を共にするが、その時には部落民は全部村の中に入つて御馳走を食べる。この時課錢の最高出捐者が最上座の席につく。五方巡りが終つて夜になると、祭官が山神堂に参り燭を神前に供へて禱念する。

沃溝面の中で現在祭典を行つて居るのは此屯山である。屯山の祭典で主役になるのは祭官であるが、巫女の役割はもつと重要な様である。山上に於ける祭式は祭官が行ふが、五方巡りの際には巫女が祭式の主役になる。儒教は祭禮には關係しない。然し祝文は儒學の出来る人が書く事は勿論であらう。

洞は行政上過去に於いてどんな取り扱ひをうけて來たかについては充分に聴き質す事が出来なかつた。それは重要な問であるが、然し更に直接に重要な事は今日此洞の上にどんな集團が累積して居るかと云ふ事である。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が
 洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部
 落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絶対權を
 もつて各戸の労働の過不過を統制して居る。其命令は
 全く絶対的である。労働を受けた者は、助力者に對し
 飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收
 支を決算する。理事長は面より任命されて居る者で年
 收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物は
 洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で
 洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時

朝鮮農村社會瞥見記

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作

洞を一體とした村仕事の慣行は尙ほ残つて居る。洞中の井戸の掃除、道普請、崖崩れの修復、堤防の補修等洞内各戸から出て働き、そのあとで皆休む。近年までは三日間も休んで居た。其間に個人々々で酒を呑んで居た。特に井戸の掃除は五月三日、四日、五日の世

業の爲に洞内全部の農民にシテ一つ洞にシテ生活してゐるものである。このツレの組織から考へても洞が如何に多く生活協同體的性格をもつたものであるかが分る。ツレは稀には田植の時から結成される時があるが一般には除草作業が主である。

ツレは毎年改めて結成されるが、先づ座上を一人、
公員二人を選出し、次いでブンヂヤンを奏する人を選
定する。又同じ日にホミ集めも行ふ。座上はツレの支
配者であり、公員は副支配者である。座上は仕事の分
擔、収入の處理等の任にあたる。ホミ集めとは全勞働
者が一人につき一本のホミをツレの團體に預ける事
で參加の證となるものである。團體本部で集められたホ

ミは仕事に出る時に、ツレには已むを得ない場合を除いては、洞内の全労働者は参加しなければならぬもので、若し餘り大した理由もなく参加しない者は、別に一定の罰は加へられないが、洞内の信用を失し仲間はずれになるものである。

る。座上是各戸別各人別に出役日數と耕作面積を算定し、自家の耕作面積以上に出役する者には、後にスルメキ(洞宴)の時に勞賃をやり、以下の者からは賃銀を支辨せしめる。

ツレに参加した人を總稱してツレ軍と云ふ。ツレ軍とは集團的行動をする場合にのみ用ゐられる語である。

ツレは其賑やかな團體行進に最も其特色を現はして居る。ツレには團體行進がつきもので、又其團體行進にはブンヂヤンがつきものである。ツレは次の様な隊形で行進する。令旗二本、農旗一本、ガムマキ(銅羅の小さなもの)二、長鼓二、銅羅一、太鼓一、小鼓四、一般勞働者、と云ふ隊列である。ガムマキ以下小鼓までがブンヂヤンである。右の如き隊列を組み樂器を鳴らすのは、行進の時である。朝早くブンヂヤン軍の合圖の音を聞いてツレ軍は一箇所に集まる。座上是豫め其日の仕事の割當てと晝食を用意して説明したり配

給したりする。ブンヂヤンは行進以外には殆ど用ひないが、勞働者がオルカトンアリの和唱する時など長鼓か太鼓がその伴奏をする。ツレ軍は終日その割り當てられた持ち場に於いて勞働する。ツレの作業は一夏の中に何回となく行はれる。

其年のツレの仕事が全部終ると舊曆七月七日に解散會がある。スルメキがそれである。漢字では洞宴と書くが一般にはスルメキと云つて居る。ツレの最後の一日の勞賃をスルメキの費用にあてるのである。餘剰があれば洞費に加ふる。スルメキを洞宴と書き、又スルメキの餘剰金を洞費にあてるところから見てもツレが洞と一體のものである事が分る。スルメキの日には洞内の有力者は酒や餅を寄附するのが例である。病人の家や寡婦の家などにはツレが除草をしてやるが、その賃銀は必ず支拂はしめる事になつて居る。

ツレと同類のものにチャリ、チャリ、クンクリと云ふのがある。これ等の中に明白に區別され得るものがある。

あるが、同義のものもある様である。チャリは田植をする時に、全洞内の者が集まつて一有力者の田植をする事である。此時にはブンヂヤンも用ゐる。其有力者は賃銀を支拂ふと共に、スルメキの時に酒を出すのが例である。

クンクリとは朝鮮語の轉る(고정)から出て居るものらしく、これも全洞員の出役の場合に用ゐられる。

クンクリの時は晝食は出ず、賃銀のみ支拂はれる。クンクリは全洞員總出動の意味の様である。クンクリにはブンヂヤンがつく時もあり、又つかぬ時もある。クンクリとツレとの別は屯山の人達にはつきりして居る。

チヨリはツレと全く同義の様である。南朝鮮一般にはツレの語が多く用ひられて居るが、屯山ではチヨリと云ふ語が多く用ゐられて居る。

プマシも一種の共同勞働である。プマシは田植や除草だけでなく様々な形式の勞働にも用ゐられて居る。

プマシとは勞働の交換であつて、甲が乙の一日の勞働をしてやれば、乙も一日の勞働を甲の爲になして報いるのである。人數は二人以上様々であるが、多くは四五人以上である。全洞員が一つのプマシに参加する様な事はない。プマシの構成は、構成員の地域的距離や親疎の關係によつて影響されて居る。プマシを行ふのは親睦な間柄である。プマシには勿論ブンヂヤンも用ひず指導者も居ない。プマシは勞働の必要に應じて行はれるのであつて、其構成員も其時々變るのが常である。プマシは内地のユドと頗る似て居る。

プマシ、クンクリ、チャリ等が食事の爲に二類に分けられて居る。一つはマルンチヨリ(乾いたチヨリ)、他の一つはヂョズンチヨリ(濡れたチヨリ)である。前者は勞働ばかりが行はれて、食事は一切各自の家でするのであり、後者は勞働して貰ふ方の人晝食間食酒等を出すのである。これ等の形式はプマシに最も多い。貧富の差の爲に食物の質(主として米と麥)の差が

あるので、これは交換の不平等になるところから、マルンチヨリの形式が起つたのである。何かの都合で多量の食物を炊き得ない場合にもマルンチヨリになるが一般には貧富の別から起つて居るらしい。

チヨリは能率上から上手は上手同志、下手は下手同志で組む事もあり、又後で酒を飲むのを楽しみにして愛飲者で組む事もあるが、食事の都合で組む場合が最も多い。即ち屯山でのチヨリはお互に麦飯で許して貰える氣易い者同志で組む場合が一番多い。

一般に人を儲ければ米飯を出すのが禮であるが、七八月頃になれば此邊の農家には大抵米がない。麥を出し合ふ事が出来る氣安な仲の人々が相互に勞力を交換する爲に出来た場合が多い。勞働能率とか興味とか云ふ事よりも米の飯の問題がこの邊では主である。チヨリの組み合わせは毎年易るけれども、その組み合わせは同の中である。

洞はそれを區分して洞の一里、洞の二里、洞の三里

は洞中の者の間に存するとは限らず、他の洞の者との間にも存して居る。

爲親契と云ふのは、親の葬式の費用の爲の契で洞内外の個人間に結ばれて居る。爲親契は契の中で重要なものであるが、親があれば必ず加入して居る譯ではない。個人の都合によるものである。爲親契は親の葬儀の爲とは云つても、その目的が明白に示されてあつて、例は父の爲、母の爲、妻の父の爲、妻の母の爲と明示されて居る。故に葬式の爲にはあるが、子や妻の死亡には無關係である。母の爲とあれば母の葬式の爲に限つて居る。

現在屯山にある爲親契は十組ある。その各々は七八人乃至三四十人の契員からなり、大抵毎回に二三圓出し合つて居る。契員の中で親の葬式を行う必要がある場合は、契は六十圓の補助金を出す規定になつて居る。この意味からすれば契は一種の保險制度と云ふ得る。然し契は全體から見れば内地の講に類するよく似て

などとして居るところもあるが、屯山は昔から此區分ではない。近頃出来た新起村も屯山の部落の一部として別に分けへだてはしない。屯山が一村を成してからどれだけの居るか分らない。傳説もない。然し一番最初にここに居た姓は姜氏であると云はれて居る。

現在屯山内の氏姓の關係を見ると、異姓が十五六ある。南平文氏が最も多く十三戸。金氏は本貫がここで十戸。文氏には宗中がある。宗中契もあるが宗廟はない。先祖の墓で一年一回宗中の祭があるものである。他姓の者には宗中の事はよく分らない。文氏には家譜はない。よく系統を索れば屯山にも兩班もあるであらうが今は分らないから居ないと笑ひながら古老が云つた。屯山は今全部農家であるが、二十一年前までは半農半漁、それに製鹽をして居た。鹽を作るものは卑賤の者とされ、兩班の住む村ではないと古老自身が云ひにくさうに云つた。

屯山には契は洞中契の外に色々の契があるが、それ

居る。春秋二回定期總會があつて契の財産の運用について協議する。役員として契長及び副契長が各一人づつが契員の内から互選して決められる。各々名譽職である。別に委員が若干名ある。外に契員以外で裕福な人に財務と云ふ役目を依頼する。財務は三人居る。契の財産は財務の手に預けられるのであるが、財務は預かつた金に一割の利子を加へて春秋の定期集會毎に契に返還しなければならぬ。即ち半年に一割の利子である。その爲に財務は契員及び員外の者に預かつた金を高利で貸すのである。

契は葬式に關聯した契として喪與契と云ふのがあつて居る。これは契員が共同利用する葬具を常備して置く爲の契である。契員は無料で契の葬具を利用する事が出来るが、契員外の者は一回につき五圓五十錢の使用料を契に支拂ふ事になつて居る。その金は葬具の修繕費として積立てられる。葬具小屋の管理の爲には契員の一人が其任にあたる。それを有司と云ふ。一般に葬具

の使用者は一回毎に有司に二圓の謝禮を出すことになつて居る。尙ほ喪與契の契員等は葬式の爲には出来る大援助し合ひ葬與もお互に擔ぐことになつて居る。

婚姻契は結婚の費用の爲の契であり、親睦契は友人間の親睦の爲の契で、大抵同年輩の者の間に結ばれ、春秋二回親睦の宴をはる。基金があれば利子をつけて第三者にも貸與する。親睦契の利子が最も低率である。親睦契は云はば宴會費の共同積立である。婚姻契も親睦契も洞内外の人の間に結ばれ、後者には群山に居る者も加はつて居る。然し大體に里の内の程度である。又採利契と云ふのがあつたが、これは共同で基金を作り、それを第三者に高率で貸し、其利子を得ようとするもので、組合組織の高利貸である。この契が最も高率である。此契も契員は洞の内外に居る。

屯山には寺もなく、又佛教の信者も居ない。儒教の先生の確信ある者は居ないが、普通に儒教の事が出来る人は二三名居る。葬祭等に於いても指示する事でそ

國民學校卒業者は七名である。

屯山で聞いた事は大體以上の事であつた。午後不二農場村を訪問しなければならなかつたし、もう晝食の時間もとづくに過ぎて居たので禮服の長老の老人及び前區長に厚く禮を述べて歸途についた。元來た道を通つて歸つたのであるが、今度はゆつくりした氣持ちで歩いた。用水路の溝はいかにも鮒や鯰が居るやうなよい釣場であるが、誰一人魚釣りして居る人は居なかつた。然し高井君の話では最近石灰を多量に田に用ひる様になつてから幾分少くなつたが、~~（？）~~と泥中にうようよする程居ると云ふ事であつた。一天雲なく午後二時頃の太陽はやつく様に照つて居た。

沃溝農場に歸つて冷たい水で顔を洗つて蘇生の思ひがした。それから中食をとり五分間ばかり休息して直ちに不二農場に向つた。バスが行く時間まで待つと

れを行ふのは一般の人である。儒教の先生を呼ぶ特別の呼稱はなく、一般に禮文を知つて居る人と云つて居る。こゝで葬式は皆儒教の式によつて行つて居る。巫女も屯山には居ない。附近の洞に居る。巫女には其續ばりがきまつて居て、春秋二回戸別に廻つて麥を貰ひあつて居る。屯山でも病人がある場合とか、難産で死んだり、若くて死んだ様な時には巫女を招じて呪術を行はしめる。然し巫女は一般に賤民と思はれ恐れ嫌はれて居る。信仰の意味では屯山の者は皆一樣である。公式には儒教を信じて居るが、巫女の活動する場面も決まつて居る。

屯山の兒童が通學する國民學校は二校あるが、入學募集人員に對し應募數は遙かに多い。今春兒童四十名募集に對し沃溝面全部で二百名、女子四十名の募集に對し百名の應募者があつた。二校で百六十名入學した。現在屯山の兒童は國民學校一年より六年迄通じて二十五名である。屯山の總人口は五百十六名である。

相當時間を空費するので、自轉車で行く事にしたが、泉君は自轉車に乗れるが、私は乗れないので、農場員の自轉車の背後に乗つて行つた。貯水池の堤防上を走る時、風があつてヘルメットが吹きとびさうであるし、重心がどうも甘く定まらず、~~（？）~~心細くなり、とうとう堤防の途中で一應降して貰ひ堤防を越してから又乗せて貰つた。沃溝農場から不二農場の産業組合事務所までは一里位もあつたであらう。

事務所には泉君が前回來た時打ち合せをして、私等の調査の事もよく知つて居る主任の人が二三日前腦溢血に罹り寝て居ると云ふので、若い事務員のひと話しした。その人は此春組合に來た人で死と何も知らず、印刷物や地圖によつて一緒に研究するより外仕方がなかつた。然し私は事務所には餘り用はなく、不二農場の村さ見せて貰ふばよいのであるから、印刷物の内から必要な點を書き抜いて、急いで農村に案内して貰つた。岐阜縣人の移住村は私としては母村について比較

的よく知つて居るので、都合がよいと思つて、そこに案内して貰つた。岐阜村は事務所から半里位で相當遠い地點にある村であるが、特にその村に行く事にした。

事務所の印刷物を通して知つたところによれば、又事務員が歩きながら説明するところによれば、所謂不二農村は現在三一八戸、行政上では沃溝郡米面中の一つの里を形成して居るのである。出身の府縣別に十戸づつ三十二の聚落をなして居る。各十戸の一聚落をここでは部落と呼び、出身の府縣名によつて岐阜村とか山形村など云つて居る。ここは不二興業會社が鹽田であつたところを田地に改修した開發新田約一千町歩の耕作の爲に、内地の各府縣から募集した農民の村で、大體三期に分つて入植して居る。

第一期地は大正十三年より十五年迄の間に約三三四町歩を耕作するもので百十戸入植して居る。第二期地は大正十四年より昭和二年の間に二九〇町歩の經營の

爲に約九六戸入植して居る。第三期地は昭和二年より昭和五年の間に三七六町歩の經營の爲に約一三五戸入植して居る。右の三つの期地は各地域的にはブロックを成して居るが、人的社會的には組織はない。産業組合の事務所が全地域の略、中央にあつて、最も遠い部落相互間の距離は約一里半である。目で見ても部落相互の距離も相當に遠く、一部落の十戸づつが水田中に島の様に點在して居る。各部落毎に一人の班長があり、産業組合の評議員會は班長によつて組織されて居る。不二農村の生産關係の事も其他の生活の事も一般的な事は此評議員會で議せられる。

本來此不二農村の土地は不二興業會社のものであつたが、此處に入植した農民達に産業組合を組織せしめ、その組合に會社が土地を賣却し、組合は三十年間にその負債を償却する事になつて居る。償却し始めてから岐阜村は今年目であるから、あと二十四年たてば各戸約三町歩の水田を所有する自作農となる譯である。

昨年度の收穫について云ふと、反當玄米二石、一戸三町歩で六十石、石四十二圓として二十五百二十圓である。毎年の負債償却額は入植期によつて異つて居るが、大體八九百圓、經營費が約千圓、然し裏作として麥その他の收穫も相當にある。各戸の收入、經營費、家計費は平均して次の様である。

	收入	經營費	家計費
第一期	三、二三四・七九	一、八〇四・三六	八七六・一三
第二期	二、八四八・四二	一、七四三・九七	六〇三・七七
第三期	二、九四〇・四一	一、六二七・八七	七四八・七九

右の經營費の中には負債償却金も含まれて居る。右の計算を見ると相當よく行つて居る様である。そして今二十四年たてば三町歩の水田を所有するのである。反當二石の玄米を收穫する水田は朝鮮では良田である。

不二農村では不二神社を維持して居る外、不二國民

學校、不二公立拓殖農士學校、ここに殘し、二、三男を北支や滿洲に出す譯である。又女子の趣都的傾向を抑へる爲に近年不二實科高等女學校も設立されて居る。その外在郷軍人不二農村分會がある、醫療は不二農村診療所の醫者が居り、此人は神職の事もするさうである。又診療所に産婆も居る。家は皆一樣で朝鮮の民家を原型として改裝した形である。

泉君と産組の事務員と私と三人細い畦道を通つて眞夏の午後の陽光をあびながら歩いたが、岐阜村に着くまでに幾つかの村の傍を通つた。

岐阜村に着くと産組の人は班長さんと呼び出さうと云ながら、私等を村の入口にある集會所の前に殘してさつさと村の奥の方に行つた。子供達が怪訝な顔をしてすぐ集まつて來た。此離れ島の様な十戸の聚落

には訪れる人も餘りないのであらう。集會所の入口には岐阜村と云ふ看板がかかつて居た。集會所は二十疊ばかり敷くがらんとした一室の建物で何の飾りもない。村の中にはアカシヤか何かの並木が道の兩側に植えてあつて、それが相當の大きさになつて居るのと、家毎に麥藁がうづ高く積んであるのと、又家が皆きたなく古びたもので、村はもう大分落ちついた村らしい景観を呈して居た。家は皆全く同形で百姓家に似合はずガラスばりであるが、そのガラスの破損して居るのが多いのが眼に付いた。其外家は甚だしく荒廢して居る様に見えた。内地の百姓家の造りであれば少し手入れをおこたつても荒廢の様が目立たないが、外觀洋風なのが此建築ではそれが著しく目立つのであらう。どの家にもうづ高くつまれて居る麥藁は燃料とするのであらう。

村の奥の方の家から産組の人に案内されて渡邊左衛門と云ふ人が來られた。私等は集會所の上り口に腰を

下して色々な事をおたづねした。班長さんが不在なので村の事に一番明るい渡邊さんが來られたのである。此岐阜村は第三期の入植の地で、最後に昭和五年に入植した人達である。入植した時は各戸の主人は大抵三十を一寸出た位のところで、四十六歳の小川さんが最も長老で、次が四十一歳の渡邊さんであつた。十戸で五十一人だつたと云ふから一戸平均五人で、平均的な家族構成であつたと思はれる。

渡邊さんと話して居ると、まもなく最長老の小川さんと班長さんが來られた。近所の家からお茶さへ運ばれた。小川さんは今年五十六歳、過勞の爲か年よりふけて見えた。私は入植後過去十年間恐らく村を率ゐて苦闘して來た三人の人達と話して居る間に、全く出征軍人を戦場に慰問して居る様な氣持になつた。

昭和五年の五月一日に五十一人の一行が此村にいたのであるが、行李もそこくにしてすぐ耕作を始めた。其後一年間は田植から收穫まで、共同で進めた。

したそれに炊事も共同で行ひ、五箇年間は浴場も共同

で、此集會場で輪番でわかつた。毎日入浴の時村中の者が集まり、色々會話して居た事は其後の村の融和の爲にどんなによかつたか分らぬと今では思つて居ると云はれた。始め共同炊事したのは、近所に野菜はなし男ばかりの家もあつたので仕方なくさうしたのであつた。今でこそ村の中に雜草も生える様になつたが、當時は大地の上は全く壁の様であつた。それでも第一年に葱と茄子とホーレン草等は作る事が出來た。他の野菜は皆鹽分の爲に育たなかつた。

水田も向で聞いたのとは違つて、よく出來なかつた。最初の年は反當糧で六斗八升、其時第一期地は其三倍位あげて居たので、努力すればあればなれると云ふ豫想はもつ事が出來た。

當時は勞賃が非常に安く、附近の半島人が牛を連れて來て五反を耕いて其賃銀が一圓六十錢であつた。人夫賃は四十五錢位であつた。反當收益は年々増して來

たが、旱害、風害の年もあつた。昨年度に於いては團體的にも個人的にも岐阜村が不二農村で第一位であつた。

十戸で一團をなして居る部落が八箇集つて、つき合仲間を作つて居る。葬式の時など、他の七部落から代表が弔問に來る事になつて居る。不二農村が全部でかくの如き組四つより成つて居る。然しこの組は餘り大きな働きは持つて居ない。

最近では結婚も不二農村内で結ばれる事が多くなつた。産組で共用の式服を備へて居るので、それを用ゐて學校の講堂で式をあげる。産組の醫者が神官の心得もあるのだ、その人が主祭者になる。

岐阜村の人達は全部武儀郡上ノ保村の大部分同じ字から來て居る。字が別の者も隣り字で、向に居た時から皆知り合つて居た仲である。學校は男も女も皆同じ學校に通つた者である。

班長さんは今四十四五であるが、入植した時渡邊さ

んと小川さんの二人の年長者が居られたので都合がよかった。若い者どもはとてもよくないと云つて居られた。

風土や人情の全く異つたところに最初落ちついた頃は心細かつた。夕闇せまる頃どこからともなくヒューと云々鳴き聲がするのを聞いて、女子供は青くなつてた。後になつて知つたが海鳥の鳴き聲であつたのである。出身の武儀郡は大體に山村で海には全く縁のないところであつた。其頃心細い思ひして居た頃には特に近所が有り難かつた。渡邊さんはほろりとしてさう云れた。又當時はお互に不平があつても誰一人云ふ者はなかつた。渡邊さんがさう云れると、班長さんも小川さんも首をたれて感慨にふける風であつた。うちの村では今でも喧嘩がありません。渡邊さんはさう云ながら、兩眼をうるをして居られた。

それから私等は急いで家の構造を見せて貰ふ爲に班長さんの宅に行つた。家の構造については三人共極

度に非難して居られた。百姓の生活知らぬ人が机上で作つた設計だと云つて居られた。落ちつきがなく、それで居て不便である。何でも朝鮮の民家を原型とし、それを外観で洋風瓦葺にしたものの様である。床の間がない事もよくない。見るからにどことなく落ちつきがない。学校の小使室の様な感じである。

三人の方に見送られながら六時半のバスに間に合ふ様に二キロの路をいそいで産組事務所の前に歸つた。そこで待つて居ると、先程會つた岐阜村の最長老の小川さんが自轉車に荷をつけて私等の傍を通つて行かれた。私は心からの親しみと敬意をもつて帽子をとつて一禮した。

〔追記〕此文は調査の旅から歸つたあとと數日間の中に出来る記憶の新たな内にと思つて急いで書いたのである。そしてそれと共に城大總力聯盟研究班調査隊社會學組の調査の計畫案を作製した。七月十一日

する調査

第一 行政的地域集團（面、里、洞、區、部落の地區的變遷、戸數）

第二 部落神の祭祀關係

第三 契集團（葬儀に於ける其力の組織）

第四 近隣團體

第五 經濟的集團（部落有財產、殖産契、其他産業上の團體、ツレ、プマシ、共同利用設備）

第六 官設的集團（青少年團體、部落會、婦人會、國民學校、警防團）

第七 宗中集團、部落内の氏姓の別

第八 洞會、村仕事慣行、懲罰及表彰の組織、共同祈願（雨乞、疫病拂ヒ等）

第九 通婚圈、賣買圈（概要聴取の程度）

第十 來住者の取扱に關する慣行

〔第二〕 不二農村に於ける移住農民の定着性に關する調査

27.80

京城社會學會の例會の席上、私は此文を讀むと共に調査隊社會學組に加ふる學生も全部そこに居たので、計畫案の説明をした。此例會は調査隊の出發前の打合せの如きものであつた。調査隊は七月二十日から約十日間ばかり現地に滞在して調査したのであるから、その報告は頗る詳細である。出来るだけ早く出版される事になつて居る。私は今此文を上梓するにあたり、學生の報告にもとづいて、一部分補修したところがある。尚ほ此文は屯山を調査した翌日に試みた沃溝農村的調査の報告にも及んで居るのであるが、ここでは割愛する事にした。

最後に私が研究班の爲に立案した調査計畫案を附記して置く。それは「屯山部落に於ける社會構造に關する調査」、の計畫案と、「不二農村に於ける移住農民の定着性に關する調査」の計畫案である。

〔第一〕 屯山部落に於ける社會構造に關する調査

（主として各種集團の活動と其地區の歴史的推移に關

朝鮮農村社會瞥見記

朝鮮農村社會瞥見記

一 調査部落の選定の方針

第一期地、第二期地及び第三期地の各々より選出する事。内地母村の地方別、東北・中部・九州のより選出する事

右の二つの條件により都合九部落を選定する事。

一 一部落各戸より聴取すべき事項

(一) 年次順家族構成表記入(別表)

(二) 母村の郡村字名

母村は山村か平坦地か郊外地か(これは母村の都市化の程度を知る爲であるから、最寄りの郡事務所、又は縣廳所在の都市までの時間的距離も聞くがよい。)

(三) 母村に居た時の生業(副業をも含む)、水田經營

の經驗(何反の水田を經營して居たか)

(四) 母村に於ける社會的地位(地主、自作、小作)、教育程度

(五) 移住後遭遇した一家の大事件

(六) 二世の教育と結婚(嫁は村内からか、母村からか、他所からか)(定着性に結びつけて質問すべき事)

(七) 將來に對する希望

歸國せんとする希望ありや、なしや。

二世への希望(特に定着性に關して)

(八) 家計費内容の検討

(九) 母村に於ける水田反當地價

二 部落内の入植當初からの事情に明るい人に聴取すべき事項

(一) 入植後離村したる者につき一の(一)、(二)、(三)、(四)、

(五)、(六)に關し聴取

(二) 部落の成長史

(三) 隣保共助の程度と其歴史的推移

生業に關するもの(田植、草取、刈入、脱穀、

共同購入及び共同販賣)

吉凶時に於けるもの(出生、結婚、病氣、葬送)

二、九部落全員の現在

年齢階級別)

三、最も定着性に富む部落は母村の如何なる條件

によるか、又入植の際の又其後の如何なる條件

によるかの推定

四、離村したる者は主として如何なる條件により

し者なるかの推定

三 机上にて整理し考察すべき事

一、一部落(十戸)全員の毎五年度人口構成表作製

(但し五歳年齢階級別)

朝鮮農村社會瞥見記